
ある青年の物語。

須賀 隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある青年の物語。

【Nコード】

N9258E

【作者名】

須賀 隆太郎

【あらすじ】

偶然の出会いから始まった、とある青年と少女の物語。

「イタタ……」

道の端にうずくまって、少女が一人、痛めたらしい足をさすっていた。その傍らには、倒れて形の歪んだ折りたたみ式自転車。

こうなったのは、およそ15分ほど前に遡る。夕飯の買い物に行くため、一人暮らしをするアパートを折りたたみ式自転車に乗って出かけた少女だったが、国道に出て走っていたところ、後ろから走ってきた車にぶつかられ、転んでしまったのだ。車を運転していたドライバーは気づかなかったのか、そのまま走り去ってしまい、その場には車にぶつかられたせいでシャフトが歪んで動かなくなった自転車と、転んだ際に足を痛めた少女だけが残されたのだった。それなりに通行量の多い道路なので、誰か助けてくれないかと淡い期待を寄せてはみたものの、事故から15分経っても、みんな少女の前を素通りしていくばかりだった。

「やっぱ都会って冷たい人ばかりなのかな……ひとまず、家に帰らないと……イタッ！」

少女はなんとか立ち上がろうとしたが、激しい痛みにすぐに膝をついてうずくまってしまった。痛めた部分を見ると、赤く腫れ上がっていた。

（まいったなあ、これじゃ歩けそうにないわ……）

自らの足を眺めて少女は途方に暮れた。と、そのとき。

「おい、あんた、どうかしたか？」

唐突に自分の上に影が差し、少女が顔を上げると、茶髪の青年が少女を心配そうに見ていた。

「あ、ちょっと車にぶつけられて転んじやって……」

少女は突如現れた救いの手に戸惑ってしまい、十分な説明ができないでいた。

「もしかして、足を痛めてるのか？」

青年は訊いてから少女の腫れ上がった足を見て、確信を抱いたらしく、

「あんた、家はどっちだ？ 向こうのコンビニに俺の車を止めてあるから、送ってってやるよ」

しゃがんで背中を向け、少女におぶさるように促しながら言った。「え、でも……」

少女は未だ戸惑いを隠せず、動かないでいた。

「ああ、さすがに初対面の男を信頼しろって言うのがムチャだったな。俺の名は村岡 むらおか 健介 けんすけ ってんだ。あんたは？」

青年は一旦立ち上がって財布から免許証を取り出して見せながら健介と名乗り、少女にも名前を訊いた。

「……私は須藤 すどう 茜 あかね って言います。えっと、村岡さんでしたっけ？ いいんですか？」

少女は茜と名乗り、健介にたずねた。

「ん、何がだ？」

健介は茜の問いかけの意図が掴めず、聞き返した。

「わざわざ助けていただいて、その上送っていただくなんて……どこかへ出かける途中ではなかったのですか？」

茜は健介が救いの手を差し伸べてくれたことに感謝しつつも、そのことで彼の本来の用事に支障が出てはいけない、と思っただけだ。

「ああ、大丈夫。今日はただドライブに行こうとしていただけだ。それに、こんな状態の女の子をほっとけるかよ」

健介は茜の質問の意図を把握すると、茜と見つめあっていて照れたのか視線を逸らしながら言った。

「村岡さん……ありがとうございます」

茜はそこでようやく安心したのか、改めて背中を向けてしゃがんだ健介の背中におぶさった。

「一応、その自転車の残骸も持って行ったほうがいいよな」

健介は茜を背負って立ち上がると、壊れてもう動きそうにない自転車を持ち上げ、コンビニに停めてきた車に向かって歩き出した。

「それで、家はどっちだ？」

茜を助手席に乗せ、自転車の残骸は後部座席に押し込むと、健介は車を発進させながら彼女に訊いた。

「あ、この国道から一本入った、裏道のほうにある、サクラ荘っていう小さなアパートです」

茜が家の場所を伝えると、健介はすぐに場所が浮かんだらしく、わかった、と頷いた。

「ここだな、サクラ荘ってのは？ 何号室だ？ その足じゃあ歩けねえだろ」

健介はアパートの前に車を停めると、茜に再度おぶさるように促した。

「……えっと、203号室です」

茜はまた戸惑って拒もうとしたが、健介の真剣な瞳に根負けし、素直におぶさりながら、部屋番号を伝えた。

「よし、着いたぞ。あとは自分で手当てして、安静にしてるんだな。じゃあ、俺はこれで」

茜を玄関で下ろすと、健介はそのまま踵を返した。

「あ、あのっ！」

茜が慌てて呼び止める声に、健介は足を止めると、

「今日は本当にありがとうございました。お礼をさせていただきたいので、連絡先を教えてもらえませんか？」

茜は足を引きずりながら、アパートの廊下に出てきて健介に呼びかけた。

「別に俺は見返りが欲しくて助けた訳じゃない。だから、礼なんていらねえよ。それじゃあな。足、お大事にな」

健介は軽く振り向いてそう言いながら手をひらひらさせると、あ

とは振り返ることなくサクラ荘を後にした。

それから数日後。茜の足も治って、彼女は買い物のために駅前の商店街に来ていた。この界限は国道が通っている割には昔ながらの街並みが残っていて、まだスーパーの類はなく、買い物は商店街の店舗をまわる必要があった。

（今日はお肉より魚にしようかな。この時期だと、秋刀魚が美味しかしら）

茜は今日のメニューを考えながら、ゆったりと商店街を歩いていた。

「へい、らっしゃい！ 今日はいいい秋刀魚が入ってるよ！ いつもなら3尾で600円だが、今日は特別に3尾で450円だ！」

茜が魚屋の前を通りかかると、店主が威勢のいい声を張り上げていた。

その値段に、商店街を歩いていた主婦が急に殺到し、店先は大混雑していた。すると、

「ケンスケエ！ ちょっと店を手伝^{こつち}ってくれええ！」

1人では限界だったのか、店主は店の奥に向かって声を張り上げた。その声に奥から出てきたのは――

「あ」

「あっ……」

ちょうど茜が魚を選んでいるところに奥から店のエプロンを着けて出てきたのは、先日、茜を助けた健介だった。全く同時に互いを認識し、2人は声を上げた。

「あんたは、こないだの……茜、だっけか。足、治ったんだな。大したことがなくて、よかったな」

健介は茜の買う魚をビニールに入れてやりながら、話しかけた。

「ええ、その節は本当にお世話になりました。村岡さんはこちらに住まわれてるんですか？」

茜が改めて健介に礼を言って、そうたずねた。

「あ、ああ。ここが実家だしな。ほら、看板見てみなよ」

健介の言葉に、茜が店の看板を見上げると、“村岡鮮魚店”と書いてあった。

「そうだったんですか……あ、じゃあこれ」

茜はひとつ頷くと、健介に代金を払い、足早に魚屋を後にした。その顔は満面の笑顔だった。

それから言うもの、茜はこまめに村岡鮮魚店へ通うようになった。ひと月が過ぎる頃には、店主とも顔なじみになり、茜が店に来たときに健介がいれば、店主が気を利かせて彼を呼び出してくれたので、2人の距離は少しずつ近づいていった。

さらに数ヶ月が過ぎた。順調に関係を深めていった2人だったが、未だにどちらからも告白をしていないため、正式な恋人同士の交際ではなく、ただの友達として、という状態だった。

（そろそろ一歩踏み出さないとならないかな……うん、明日健介さんに正式に告白しよう）

ある日の夜、茜はついに健介に告白をする決心をした。

翌日、茜は意気揚々と村岡鮮魚店に向かった。と、この日は珍しく健介が店頭に立っていたので、茜は彼に向かって走りだそうとしたのだが、反対側から別の女性が走ってきて、健介に飛びついた。

（……………！）

茜はショックを受けた。謎の女性に抱きつかれている健介の表情は、茜といるときよりも輝いて見えたのだ。

茜は何も言わずに踵を返すと、走り去った。と、偶然か必然か、健介が振り向いて、走り去る茜の姿を見つけた。

「あ、茜っ！？ オヤジ、ちょっと抜けるぞ！ 店は任せた！ お前もいつまでも抱きついてるんじゃない！」

健介は謎の女性を振り払うと、魚屋のエプロンを脱ぎ捨てて茜の後を追った。

商店街のはずれにある公園で健介は茜に追いついた。

「茜、アイツは……」

健介が乱れた息を整えながら切り出そうとすると、

「私よりあの女性ひとのほうがいいのね。あの女性ひとに抱きつかれていたあなたの顔、私といるときよりずっといい表情かおしてたわ。でも、私たち、正式なお付き合いはしてなかったから、私は別に文句を言うつもりはないわ。さよなら、健介さん」

茜が少し涙を浮かべて切り返し、そのまま別れを告げて立ち去ろうとした。

「ちょっと待てよ！ 俺の話を聞けっ！ さっきのは、5年前に両親が離婚したときに母親に引き取られて離ればなれになった、俺の妹みどりの翠だ。恥ずかしい話だが、いい歳してかなりのブラコンでな、半年に一度会う度にああやって飛びついてくるんだ。俺も久しぶりに会う家族に顔が緩んでいたかもしれないけど、決して浮気じゃねえ、俺が本当に好きなのはお前だけだ！」

健介は立ち去ろうとした茜の背中に向かって叫んだ。

「い、妹……？ それ、ホントなの……？」

茜は立ち止まって振り返ると、健介にたずねた。

「ああ、本当だ」

健介は立ち止まった茜に歩み寄りながら、大きく頷いた。

「あんな場面ものを見せられたら、単純に信じろと言っても難しいかもしれないねえ。だから、これで信じてくれねえか？」

健介は立ち止まって戸惑いを隠せないでいる茜を抱きしめると、その唇にキスをした。

「……！」

茜は突然抱きしめられただけでなく不意打ちのようにキスをされ、完全に頭が真っ白になってしまった。

「今までなあなあで来ちまったことが今回の誤解を招いたことは疑いようのない事実だ。すまなかった。好きだ、茜。俺と正式に付き合ってほしい」

健介は唇を離し、抱きしめていた茜を解放すると、一度頭を下げて謝り、改めて告白をした。

「健介さん……！」

茜は感極まったのか、ボロボロと涙を流しながら健介に抱きついた。健介は、そんな彼女を優しく受け止め、泣き止むまでずっと抱きしめていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258e/>

ある青年の物語。

2011年3月13日19時12分発行